不穏宣伝派の幹部捕はる

三百余の会員ある 大阪借家人同盟会の会長以下九名

[illegible]に不穏宣伝ビラ事件で取押へられた[illegible]首領[illegible]以下の一派について其の後東京地方裁判所検事局で[illegible]取調べた結果[illegible]大阪[illegible]三百余名の会員を有する借家人同盟会[illegible]会長[illegible]大阪府[illegible]

成瀬[illegible]町野村某他 三名を [illegible]

[illegible]の三呉と警視庁[illegible]刑事と六日午前二時[illegible]三名の刑事が[illegible]急行して[illegible]

コズロフを送る（七）

大杉 栄

[illegible]る。男子と三人で行かう。時間がないから早く」

[illegible]は男子の家に着くと直ぐ、[illegible]様になつて、女房をせき立てた。着物を着かへたり[illegible]をつくつたりするのに、いつも時間がかゝるだらうと思つてゐると、[illegible]立てたのだ。女房は其の間でよかつた。四五日前に自分で洋衣がはりに買つた、縦にバンドをしめて、ちよつと洋服風のものが、まだよく似合つてはゐなかつた。[illegible]買つてよかつた。荷物と[illegible]では、又[illegible]の小さな手提一つばい、タオルや石鹸箱や[illegible]の着がへや、汽車の中で子[illegible]に読んで聞かせる童話の本がはいつたゞけだつた。そして、女房の着がへになるブラウジとスカアトとは、あんまり邪魔になつてはと云ふ心配から、僕が[illegible]んで亭主のポケットの中に蔵ひこむ事にした。

「これでいゝでせう。さあ、行きませう」

と、こんどは僕の方が女房からせき立てられた。しかし、時計を見ると、実際はまだ一時間程の余裕があるのだつた。

僕は「うん、出かけよう」と云ひながら、裸のまゝはだしで庭に降りて、子供のおもちやの兎を見に行つた。二坪程の囲ひをして、そこに四五疋入れて置いたのが、どうしたのか其の中の一番大きな雄が一疋そとへ出てゐた。僕は捕らうと云ふつてもいゝ位に、あちこちと逃げ廻つた。やうやくそれを捉まへて囲ひの中に入れた。

そして「フワフワ」と云ひながら汗をふいてゐると、其の兎がちよこなんと又僕の直ぐ前の囲ひのそとにゐる。僕は不思議に思つて囲ひのまはりを探つて見た。一尺あまり土の中に埋めてある竹の垣には、どこにも、そんな大きな兎の出る隙間はなかつた。生れたばかりの小さな子兎なら、よく其の狭い竹の隙間から出て来て、そして近所の泥棒猫の餌食になつた。で、小兎は皆な別の箱の中に移す事にしてゐた。しかし大きな親兎がそこから飛び出したのは、これが始めてだつた。僕は苦心して又それを捉まへて囲ひの中に入れた。

そして、僕は又「フワフワ」と云ひながら、流れるやうな汗をふいてゐた。すると、又僕の直ぐ前に、囲ひのそとに今の兎がゐるのだ。僕は全くわけが分らなくなると云ふよりも寧ろ、猛然として其の兎を追つかけた。そしてやうやくの事で又それを捉まへて囲ひの中に入れた。

兎は直ぐに囲ひの中の穴の中にはいつた。そこには、彼等のはいる箱が一つと、彼等自身の掘つた穴が二つあるのだつた。其の穴の一つが、最近此の大きな兎によつて、切り下りに掘り拡げられてゐるのか、掘り下げられてゐるのか、とにかく掘り進められてゐる形跡があつた。穴のまわりには、掘り出した新しい土が、[illegible]高く積まれてあつた。が、[illegible]はこんな事は大して気にも留めずにゐた。其の穴の中へ兎がはいつたのだ。

僕はふと気がついて、さつきから幾度も忽然として兎が現はれ出た、囲ひのそとの一隅へ行つて見た。そこには、やはり二坪位に、茄子の畑が出来てゐた。砂地に丹精して作つた其の茄子の幾本かが、貧しい葉をめちやくちやに食はれてゐるのが先づ目についた。

「畜生、やりやがつたな」

と思ひながら、僕はそこへ行つて見て驚いた。其の一本の茄子の木の下に、直径五寸位の、紛ひもない兎の穴が掘られてゐたのだつた。

囲ひの中の穴と此の穴との距離とは二間ばかりあつた。そして囲ひの中の穴は此の方へ進んでゐて、そして其の畑の方にある此の穴は北の方へはいりこんでゐた。が、どうしても其の穴と此の穴とは続いてゐるものとしか考へられなかつた。

「パパ、早く行きませうよ。ス、ガちやんとこへ早く行きませうよ」

僕が其の穴を足で砂埋めにしてゐると、魔子が縁側から大きな声で叫んだ。もういゝ時間だらう、と思つて、僕も急いで縁に足を拭ひに行つた。

不穏文書指令の一味 自動車で東京に護送

他連累者を検挙中

[illegible]不穏文書を撒布[illegible]一派は[illegible]取調べ[illegible]日午前[illegible]自動車[illegible]東京[illegible]護送[illegible]逃走した[illegible]大阪附近に潜伏せる[illegible]極力捜査中である

コズロフを送る（八）

大杉 栄

時間はちやうどよかつた。家には、女房の伯母と、其の伯母が世話してゐるエスと云ふ三つになる女の子と、もう一人生れてまだ二ケ月ばかりのルイズと云ふやはり女の子とを残して行くのだ。が、エスは伯母さへゐれば、ほかの誰がゐなくてもよかつた。そしてルイズは、生れてからちつとも抱かずに揺籃の上にばかり寝かしつけてあるので、[illegible]を飲む時間が来たらミルクの瓶をあてがつてやると云ふ事のほかには、誰の世話もいらなかつた。

「ちよつと行つて来ますよ」

と、[illegible]

る女房は、三四日どこかへ出かけるのにも、気軽にちよつと出かけると云つただけで安心して出かける事が出来た。

汽車は、上りの寝台を一つ買つてあつたのだが、うまく其の隣りの二等室が一つあいてゐた。女房と子供とを寝台に寝さして、僕一人はほかの室へ行つて、こつくりこつくり居眠りする覚悟でゐたのだが、それで助かつて、親子三人の隣合つてからだ楽にして寝る事が出来た。

「又きつと、行きは大名、帰りは乞食だぞ」

二人はベッドにはいりながら去年の夏の[illegible]の旅のさうした事を思ひ出しながら、微笑み合つた。

よく寝た。いつもの旅行なら必ずまいて行く警察の尾行を、こんどは殊更に三人もつけて来たのだが、そして其の男等は寝台車の隣の室に控えてゐたのだが、そしてそれが各府県毎に交代しては、ちよいと僕等の室をのぞきに来るのだが、そんな事も何にも知らずに寝た。

間抜な奴だと、自分でカアテンをあけてのぞきこんで、怒鳴られるか、唾をひつかけられるか、なぐられるかするのだが。少し利口な奴だと、ボーイに云ひつけてのぞかせる。前の警察のから貰つた送り状のやうなものと、自分等が引継いだ品物と、数があつてゐるかどうか確める必要があるのだ。

「どちらでお降りになりますか」

さつき[illegible]した時にも聞いて、それを前かの尾行に書きつけて行つたのを、寝てから暫くして又ボーイが尋ねに来た。

「はあ、京都。どこで降りるのか分らんので心配してゐやがるんだな」と、僕は思つたが「さつきも云つた通り、まだどこで降りるか分らないんだ」と何んにも知らんやうな顔をして答へて置いた。

すると、暫くして又「寝台券のもう半分の方をちよいと見せて戴きたいんですが」と云つて来た。「いゝえ、見せません」と女房が云ふのを、ボーイがうるさく迫るので、とうとう女房が、カンシヤク玉を破裂さして「あなたにさう云ひつけた男にこゝへ来いと云つて下さい」と怒鳴りつけた。ボーイは赤い顔をして引きさがつたまゝ、それつきりもうスパイの下働きをしに来なかつた。そしてきつと、又怒鳴られるのが恐くて、多分カアテンからのぞきにも来なかつたのだらうかとも思はれる。

大津近くなつて目がさめた。旅行案内を出して、神戸に着く時刻を調べて見ると、少し早すぎる。三の宮から直ぐ県庁へ行つて、警察部長に会つて、コズロフに会ふ許可を得ようと思つてゐるのだが、それにしては朝少し早く三の宮に着きすぎる。

京都で降りて、二三時間時間をつぶさうときめた。京都には、もう二三年会はない友人が、一人ゐた。で、それを訪ねる事にきめた。